

1000 冊読破の夢

学部長 小 柳 治 宣 (教授 社会保障論)

大学入学直後に私が立てた目標——それは、「在学4年間で1000冊の本を読破するぞ」というものだった。これはかなり高いハードルである。4年間で1000冊といえば、一年間に250冊、一週間に5冊の割で読み続けていかなければならないことになる。ということに改めて考えたのは、ちょっと後のことで入学当初は充分実現できると思い込んでいた。

そもそもなぜそんなことを思い付いたのかといえば、一つは、北杜夫の『どくとるマンボウ青春記』(中公文庫)に、当時の学生(旧制高校)たちが、互いにどれだけ多くの本を読めるかを競い合ったという話が出てきたこと。もう一つは、文藝春秋社を創設した菊池寛が、中学生の頃、故郷高松の図書館にあった本のほとんどすべてを読み尽くしたという逸話を何かで目にしたこと。この二つの話に触発されてのことであった。(この菊池寛の逸話はずっと後になって、彼の『半自叙伝』(講談社学術文庫)の中に次のように書かれているのを確認した。「私は一日として図書館に通わないことはなかった。蔵書は二万余冊だったが、その中で少しでも興味のあるものはみんな借りたといってもよかった。私は半生を学校へ通うよりはもっと熱心に図書館へ通った男であるが、その最初の習慣は郷里の図書館から始まったわけである。」〔36頁〕)

始めてみると、週に5冊読破するのは、並大抵のことではなかった。まず、厚い本は避けて薄い文庫本からスタートしたのだが、これがそもそも失敗だった。谷崎潤一郎『春琴抄』、志賀直哉『和解』やカフカ『変身』(いずれも新潮文庫)、トルストイ『イワン・イリッチの死』(岩波文庫)などは100頁程度で薄いことは薄いのだが、そう簡単に読み切れる相手ではなかった。一年に250冊、4年で1000冊の夢は、あっという間に砕け散った。

だがそう簡単にあきらめるのも悔しいので、「1000冊読破」の目標を、「1000冊の本に目を通す」に変えた。本の最初の一頁目を専用のノートに筆記することにしたのだ。手に取った本は、どんなものであれ、必ず一頁目を筆記する。面白ければ、そのまま読み続ける。

これならば本の厚さも、内容の難易度も関係がない。こうなると、ふだんあまり手に取らない分野の本でも気軽に開いてみるようになった。一冊まるまる読み切らなければいけないという呪縛から解放されると、逆に図書館で本を捜すのが楽しみになってくる。一頁分書き写した本は全部読んでいなくとも、友人になったような気がするものなのだ。そうやって、本との交友録のような『最初の一頁ノート』が年ごとに数を増していくのが、楽しみになってきた。もちろん、『交友録』に記録された本の中でまるまる最後まで読んだ本は、最後の一頁も筆写したし、途中で印象に残った箇所があると抜き書きもした。一年も続けると、それが習慣となってしまうものだ。今でも私は『本との交友ノート』をつけ続けており、それらは、何のものにも代え難い私の「知の財産」となっている。最近もこうした『ノート』をもとにして、『介護文学にみる老いの姿』(朝文社)という小さな本を出版した。

新入生諸君も、本は、初めから終わりまで全部読まなければいけないという固定観念を捨てて、もっと気軽に本と付き合ってみて欲しい。図書館はそのためのテーマパークのようなものだ。さあ、さっそく何でもいから一冊手に取ってみよう。